

News letter

建築家とつくる家
個性をカタチに、賢い家づくり。

2026.11 Vol.66

R+house



都市で自然を感じる3層の光庭住宅

物件の詳細情報はここら [→](#)

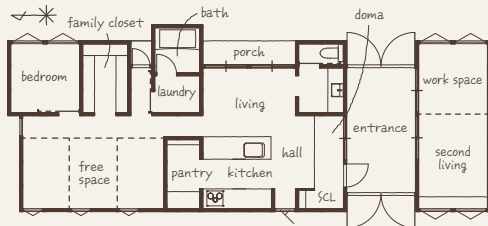


桟橋を架ける暮らし

広大な敷地を前に、自分たちだけの閉ざされた楽園を築くのではなく「地域へ開く」ことを選んだお施主様。その美しき直感に
 応え、東の「水の流れ」（高津川）と西の「人の流れ」（国道）へと差し出すように、一本の「桟橋」を架けました。

住棟を直交方向に貫く小径は、「人の流れ」と「水の流れ」に差し出す桟橋、あるいは「みんなの船着場」です。日々の生活が
 船着場へと優しく滲み出し、流れを往来する人々がひとつ、またひとつと引き寄せられていきます。

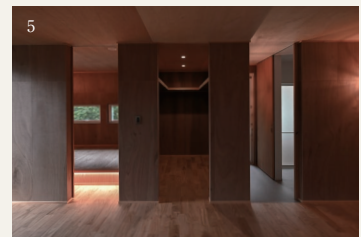
日々の積み重ねの中で少しずつ土地に根を張り、やがてこの場所でき表現しえない新しい暮らしのヴィジョンを描き出します。



1. 西側外観。生活のプライバシーを確保しつつ、COMMONスペース「みんなの船着場」を地域に向けてひらく佇まい。
2. 「みんなのスロープ」から「みんなの船着場」と敷地の東側に広がる山並みを見通す。
3. 「水の流れ」にひらく開放的なLDK。豊かな自然を引き込み、日常が地域と繋がる空間。造作キッチンはダイニングテーブルを兼ねるつくり。
4. 建物は温熱的には分棟となるが、単一系統のシステムで全体の換気をまかなうダクトスペース計画。
5. 仕切りの合間に視線が通り、奥の緑と光が覗く、木のぬくもりが広がる将来分割可能なフリースペース。
6. 木の表情と「水の流れ」に面する爽やかなサニタリーゾーンが織りなす美しい対比。



土間を挟んだ「離れ」、普段はご主人の仕事部屋として、
 来客時にはセカンドリビングとして使用。



プライベートな寝室空間と
 共用土間を緩やかにつなぐ
 緩衝帯としても機能。

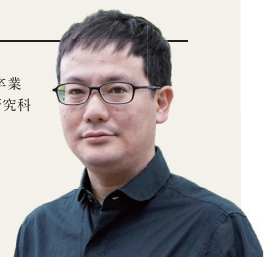
数匹の猫と暮らす住まいは
 ラウンベニアで仕上げ、
 傷もまた暮らしの一部となります。



建築家プロフィール

池原 靖史 Ikehara Yasushi

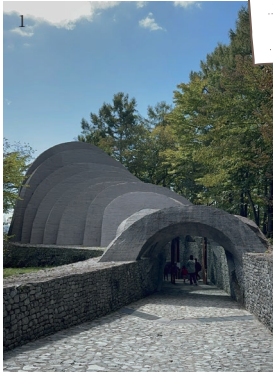
1983年 愛知県生まれ
 2007年 早稲田大学理工学部建築学科 卒業
 2009年 早稲田大学大学院創造理工学研究科
 建築学専攻 修了
 2009年-2010年 内藤廣建築設計事務所
 2010年-2015年 安藤忠雄建築研究所
 現在 池原靖史建築設計事務所
 趣 味 ルアーフィッシング、まち歩き



memo

Architect: ケンドリック・バングス・ケロッグ

Location: 長野県軽井沢町



- 1: 石積みのアプローチが建築へと連なり、訪れる人を静かな祈りの場へ導きます。
- 2: 豊かな森に包まれ、大地の一部が隆起したように、静かで力強く佇む石の教会。
- 3: 荒々しい石と透明なガラスが重なり、自然と建築の境界を曖昧にしています。
- 4: 曲線を描く石積みの壁に導かれながら、森の中を歩くように建築へ近づきます。

大地と光がつくる祈りの場

今回ご紹介するのは、何度か訪れている長野県軽井沢町にある「石の教会 内村鑑三記念堂」です。大学院生の頃、設計の道に進む意志を固めたきっかけは、フランスのロンシャン礼拝堂でした。内部に差し込む光を見て、「ああ、建築はいいな」と思ったのです。石の教会を訪れたとき、あの時の感覚が蘇りました。幾重にも連なる石とガラス、その間から差し込む光。軽井沢の森に包まれ、まるで大地から生まれたように、静かに力強く佇んでいます。造形の美しさだけではなく、その土地に根を下ろし、そこにあり続ける姿に惹かれます。いつか教会を設計したいという想いととも、今、日々向き合うのは主に住宅です。家もまた、時間を重ねながら、そこに暮らす家族を静かに支え、ふとした瞬間に「ああ、いい建築だな」と思ってもらえる存在でありたいと思っています。

島崎 衛 Shimazaki Mamoru

株式会社サオビ
趣味: サッカー、写真、家庭菜園



建築家 おススメ “ライフ”

6メートルキッチンの訳

自宅を設計するとき、「人をたくさん呼べる家にしたい」と考えていました。ですが限られた面積の中で、家族の居場所と来客のスペースをそれぞれつくるのは難しいものです。そこで我が家ではキッチンカウンターを少し大きくつくることにしました。普段は季節の飾り物や植物を置いているのですが、友人が集まると料理やお酒が並び、自然と人が集まる場所になります。来客のために新たな場所をつくるのではなく、もともと必要な場所を少し広げて兼ねる。そうすることで、家族のダイニングもしっかり確保できました。

さらに、このキッチンカウンターは空間を緩やかに仕切ります。立つと視線が抜け、座るとほどよく囲まれる。その心地よさは、暮らし始めてから気づいた発見でした。最近では、歩く娘の姿がカウンター越しに少しずつ見えるようになりました。以前は見えなかった姿に気づくたび、成長を感じます。制限をポジティブに変えるアイデアと、暮らし始めてから気づく新たな発見。そんなところにも、家づくりの面白さがありますね。



筒井 達也 Tsutsui Tatsuya

FANFARE Co.,Ltd.
趣味: 良いデザインのプロダクトをリサーチ、
お笑いコンテンツの消費

リビングから
キッチンカウンターを越えて
ダイニングスペースがあります。



この日は両親を招いて
娘の誕生日パーティを
開きました。

Topics 1 愛着のあるわが家で プロとつくる家づくりの価値を思う

編集部
M.H.

中古戸建を購入し、予算と戦いながら自力でパズルを組み替えるように間取りを考え、リフォームしたのが4年前。図面にとらめっこしながら自分の手で試行錯誤して形にした空間は、今でも愛着のある大切な我が家です。

けれど、いま携わっている仕事を通じて建築家が手掛ける住まいに触れる機会が増えるにつれ、ふと、自分が解いたパズルの「その先」にあったはずの可能性について考えるようになりました。私がやったのは「限られた枠内にどう納めるか」というレイアウトの作業で、プロの視点はそのずっと先にあります。



もし建築家がこの家をゼロから見つめ直したら、南側の隣家をどうかわし、冬の低い光をどの角度から引き込むのか。限られた制約の中であっても、視線を外へ逃がす窓の工夫で実際の坪数以上の広がり演出し、風の通り道まで計算し尽くした空間を描いたはず。豊富な知識と丁寧なヒアリングを通じて、私自身も気づいていない「本当の心地よさ」を引き出し、空間へと落とし込んでいく。自分では想像もつかない提案によって、住まいの可能性が最大限に引き出された暮らしが生まれていたかもしれない・・・そう思うと「プロとつくる家づくり」にしかない価値に、心惹かれずにはいられません。

もし、我が家を一から建て直せるのであれば、あるいはプロの手で再び形にできるのであれば・・・などと、愛おしい我が家で贅沢な妄想を膨らませる日々です。

Topics 2 思い出と一緒に家を育てる

編集部
S.H.

我が家には4歳の男の子がいます。それは元気で、毎日飛び跳ね、何かを作り、何かを書き、とても忙しいそうです。新居にダイニングテーブルを迎えた時、お店の方からは汚れ防止のテーブルマットをお勧めされました。でも、私たちはあえてそのまま使うことにしました。時間とともに変わっていく風合いを楽しむのもいいものだよ、と聞いたからです。今、そのテーブルには、子どもがもっと小さな頃にスプーンで叩いた小さな凹みや、私が熱いお鍋を置いて焦がしてしまった跡が残っています。ふと足元を見れば、床にもおもちゃを投げてできた正体不明の傷がたくさん。もちろん、すべてを笑って許せるわけではありません。リビングのカーテンに豪快にお絵描きされた時は、さすがに雷を落としました。それでも、家の中を傷ひとつなく綺麗に保ち続けることだけが正解ではない

ような気がしています。昔は柱に子どもの身長を刻むお家もありましたよね。私には少し勇気がいりますが、こうした日々の跡もまた、家族の歴史なのかもしれません。いつか子どもが成長し、新しいテーブルを迎える日が来たとき、私たちはこの傷を見て今の慌ただしい毎日を懐かしく思い出すのでしょうか。家族の軌跡がそっと残されていく、温かな暮らしのにおいがする家。毎日の思い出とともに家を育てていくのも、また素敵なことだと思うのです。



R+house
network



建築家との家づくりをもっと知りたい方
R+house ネットワークサイトはこちら

R+houseでお家を建てられたお施主様へ

家づくりのご感想をぜひ聞かせてください
ご回答いただいた方にAmazonギフトカード3,000円分をプレゼント

※キャンペーン主催：株式会社くふう住まいコンサルティング
※AmazonはAmazon.com, Inc. またはその関連会社の商標です。

